

新キャプテンとして

主将 3年 氏 家 大

3月18日に幹部交代式を迎えた。この日をもって主将となったわけだが、こうした区切りがあると、改めて身が引き締まる思いがする。とは言っても、これからの一年を想像すると複雑な思いだ。『この一年はやってやるぞ』という思いと、『なんだかんだ言っても大変だろうな』という若干の不安もないわけではない。

昨年一年は、主将の松村さんの姿を見ていろいろと学ばせてもらったつもりだ。今になって思い起こすと、当時は「大変そうだなあ。」と軽い気持ちで見ていた事も、少し異なる視点で思い起こされる。ただ大変だと感じるのは当然だと思うが、これからは自分がそういった状況、あるいは立場に陥ったときにどう対処するか、それこそが重要になってくると思う。まあこんな事がわかったからと言って、肝心なのはそれをどうするか、ということなのだから、直結した考えとはならない。

こんなことを思いながら、これから自分はどういう風にクラブをやっていきたいか、クラブを作っていくかということを考えるようになった。そうは言っても、具体的にあれこれをするというものではなく、抽象的でもいいからこんなクラブにしたいという全体図みたいなものを描きたいと思っている。しかし、今だそういった全体図は出来上がっていない。具体的なものでこうしたいということを挙げるとすれば、新入部員の確実なる確保、実りある毎回の活動、運営し易いようにうまく仕事を分担させる、などの事が挙げられる。でも、今年一年主将を務めるにあたっては、そういう細かい一つ一つの事柄だけでなく、むしろ一年後のクラブの姿を頭に描きつつ、何事にも取り組んでいきたい。

僕の思い描く一年後の姿とは、各部員がそれぞ

れ自分の仕事を責任をもって行い、その結果クラブ全体が活気にあふれる場になることである。今はどうしても、上の人が他の人に仕事を振り分けて、それを他の人は仕事としてこなすという感じがする。そうではなく、自分が何をすれば良いか考え、分からなければ人に聞き、自分達がクラブをやっていくんだという雰囲気を出していきたい。こんなことを書くと、周りの部員に対する希望とか期待と受けとられるかもしれないが、主将という立場からもこういった事は変えていけるものだと思う。

こんなことを書くのも、今年度は3回生が一人しかいないということが一つの要因となっている気がする。先に述べたようにクラブの体質なり構造を変えていかないと、正直行ってしんどいと思う所もある。それに、このような形にクラブをもっていくことは、今の低迷したクラブを変えることにもなると思う。皆がクラブ内における自分の役割というものを実感するようになれば、根本的にそれがクラブの強さ、パワーになっていくのでは。やっぱり皆がやらなくては、クラブのうち数人だけが主導していく形では、力強さというものはないし、雰囲気としてそれがあらわれないと思う。このような形にクラブをもっていくのは、具体的に何をすればよい、ということが分からないので難しいと思うが、少なくともこの一年は何をするにしてもこんなことを念頭に置きつつやっていきたい。

とにかく今年がんばるしかない。この一言に尽きると思う。

「何か」

1年 多田 晋

頭上には何とも形容しがたい雲が横たわっていた。(しかしまた、何ともシュールな感じの空だな。ここはどこかの近代美術館か？ドラマとかでは雲一つない抜けるような青空だろ。こういう場面では。)なんて少し(だいぶ?)場違いなことを考えていたら、後席から「よしそろそろ行こうか」時が止まった。直前まであんなに空を飛ぶことを渴望していたのが、今、この瞬間になって恐怖が沸き出てきた。混乱状態の俺に更に後席から「君にとっては最初のフライトになるね。きっと忘れることはできないだろうね。それでは見たこともない世界へ出発！」(君にとっては最初で最後のフライトになるね。もはや忘れることもできないだろうね。それでは見たこともないあっちの世界へ出発!)と甚だしく勘違いをしている男、多田晋(19歳)の生涯初(最後?)のフライトが始まった。

さて、ここで話を遡らせてもらおう。時は1999年4月1日。そう同志社大学入学式の日である。あの時の俺はある決意を胸に秘めていた。「何かしたい。」別に決意といった大それたことではないが、その頃の俺には重大なことであった。高校ではクラブをやっておらず、毎日それは暇な時間を過ごしてきた。その頃はそれで楽しかったし、後悔はしていないが、大学では別の生活がしたかった。ただし「何かをしたい」の「何」はまだ決めていなかった。勉強、バイト、クラブ。選択は無限大に思えた。しかし上記した通り「何か」の具体的なイメージが無かったので、正に暗中摸索であった。

「君、空飛んでみない？」と言われた。ストレートに正面から、完全無欠に言われた。生まれて初めてだった。初対面の人に「空飛ばない」と言われたのは。(当たり前か)しかし、何か違った。

他のクラブやサークルとは。その「何か」は今も尚、いや今はまだわからない。だが、あの言葉の中に、俺の心の中にあるものが共振した。こうなると話は早い。見つけてしまったのだ。俺は。

「いつも飛んでいるわけじゃないんすか？」決定的に勘違いしていたことはここであった。最初のイメージでは「ぐらいだあ」なるもので大空を自由勝手に飛び回る、といったものであった。しかし違った。まず感じたことは、自分達がクラブを運営しているということ。中学のクラブの様に顧問が言ったメニューをこなしていくだけ、というクラブの方式という考えしか持っていなかった僕には刺激的であった。そして、フライトのために、機体の整備、そして学科。そう全てはフライトのために。いつしか、最初のフライトとなるであろう日から逆算して過ごすようになった。

(今から飛ぶのか？俺が?)あれほど思っていたコックピットの中にいる自分の姿が思い描けない。具体的に言う就先程ピストから「次、多田搭乗」と言われてからだ。(搭乗?何?グライダー?グライダーって空飛ぶやつだよな。誰が搭乗?俺?俺が飛ぶの?つーかなんで俺がこんなところにいるの?)パニックだった。先輩に促されるまま、グライダーへと向かった。向かう途中グライダーを見た。いや先程からずっと見えていたのだが、より、リアルにグライダーを感じた。(あ、俺はあの時感じた「何か」を見つける一歩を踏み出そうとしているのだな。)キャノピーが閉じられた。ふと空を見あげた。頭上には何とも形容しがたい雲が横たわっていた。

私と航空部

1年 小林 義徳

航空。この言葉は、小さい頃から飛行機好きだった僕にとって魅力的なものである。飛行機の世界では、何に於てもスケールが桁違いに大きい。例えば旅客機一機を飛ばすにしても、何人もの人手、最新鋭の技術、完璧な安全体制、さらに莫大な費用などがあって初めて飛ぶことができる。そして一旦離陸すると、機体は想像を絶する速さでマイナス50度を下回る高高度の世界を突き進む。機内では、今機体がそういう状態にあることを微塵も感じることはなく、窓の外を眺めれば、心地よい眩しさの中に遙か彼方まで雲の世界が広がっている。そしてこういったこと全てが、僕にとっては非常に魅力的なものなのである。こんな僕にとって大学でのクラブ選びは航空関係以外の分野は考えられなかった。そして迷うことなく選んだのが、最も本格的なこの航空部。そして現在に至っている。入部当初は、さまざまな不安や心配事があった。体育会の性格についていけるか、体力的に大丈夫か、仕事をしっかりこなせるか等々。しかしそんなことに構わず飛び込んで正解だった。体育会と聞いて想像するのは、上下関係の厳しさ、無意味と思われる事でもやるというもののだが、航空部ではそういうものは無かった。確かに厳しい上下関係も必要だろうが、上回生とは直接口もきけないなんていう雰囲気では、柔軟性のない伝統を引き継ぐのみのクラブになってしまう。というわけで極端な体育会的性格を持つクラブではなかったので良かったと思っている。また体力面についても、そんなに心配すべきことではなかった。確かに初合宿では一日でくたくたになり、こんなことを一週間も続けれるのかと思ったりもしたが、何とか無事過ごすことができ、合宿の回数を重ねていくうちに要領が分かってきて、体力もついて

きたのか、さほど辛くはなくなってきた。だから入部当初の心配事は、今考えればまさに杞憂以外の何物でもなかった。

さて、取越苦労の話はここまでとして、次は肝心のフライトについてである。初フライトの時までに上級生やOBの方々からいろんなことを教えてもらい、またフライトに関する本を読んだりして基本的なことは頭の中でマスターして初フライトに臨んだ。しかしこれが思いの外微妙な操作に反応し、頭で分かっていることも大切だが、体で覚えていかない限り上達は無いということが分かった。これが操縦に関する印象であるが、初めて飛び立った時の印象は鮮烈なものだった。搭乗準備を済ませた僕の後席に余裕の表情で乗り込んだ教官からの一言は「楽しく飛ばう。」だった。キャノピーをロックし、緊張して離陸するのを待つ。と、索が何やら動き出したのが見えた。次の瞬間背中に強いGがかかり、ヒューという音と共に機体は一気に地上から飛び立った。無線からは何やら訳のわからない外国語が聞こえてくる。その間にも機体はどんどん上昇し、やがて水平になり離脱。離脱後は風切り音がわずかに聞こえているくらいで、いたって静かな世界である。やはり空は良い。一発目で僕はグライダーの虜になってしまったらしい。今まで一年続けてきたわけだがやはりこれは飛行回数と技能は比例するものと言える。よってこれからもどんどん飛んでいきたいと思うし、フライト以外の事務の面でも色々なことを経験させてもらっているのも、吸収できることはどんどん吸収して自分を磨いていこうと思う。

私と航空部

1年 平 中 淳

航空部に入部して、もうすぐ1年が過ぎようとしている。そう、僕と航空部との出会いは、99年4月5日の事である。

あの日、僕は授業の登録などが終わり、帰ろうとしていた。その時、航空部の先輩に声をかけられ、出店に向かった。この瞬間から僕の人生が少しずつ変わっていったように思う。

入部の動機は、大学でしかできない事、昔からの夢でもある自分一人で空を自由に飛び回る事ができるというので、これはすばらしいと思い、僕は、航空部に入部することに決めました。BOXに行くと、とても仲の良さそうな上回生達が僕を歓迎してくれました。グライダーについてや合宿についてもとても親切に説明してくれました。また、とても長いミーティングでは僕は少しいたくつだったけれど上回生達の真剣にいろいろ話し合う姿に、いつか僕もこうなってやると決心しました。

ふと気がつくともう6月の初合宿。なれないグランドワークに悪戦苦闘しながらもついにやってきた僕の搭乗。搭乗準備の仕方などその時は、まったく頭に残ってなかったが、上回生の手助けを得て、いざ出発。それから先の事はよく覚えてないが、着陸してからもしばらくあの大空を飛んでいるすばらしい感じがぬけきれず、教官の講評にもただ単に「すごく良かった。」としか言えず、周りの言葉も全然、頭に入ってこなかった。後から同回生の人に聞くと、すごい顔をしていたらしい(?)。この一発でああ航空部に入部して本当に良かったと改めて思いました。そしてまた飛びたいという想いだけが僕の頭の中をぐるぐる回りました。空を自分の力で飛ぶという今までやったことのない3次元の世界にこの時から僕はハマッ

ていったように思います。結局、この合宿で僕は、9発飛ばしてもらい、とても満足して合宿を終えたことを覚えています。

そして、僕はもうすぐ2回生を迎えます。まだ上回生というには、全然ふさわしくないぐらい、いろいろなことに対する経験が足りませんが、この航空部に入ってよかったと思えた体験、初フライトにおけるあのすばらしき感動、などなどをそのまま後輩へと伝えていきたいと思います。そしてその後輩達も航空部に入ってよかったと思わせるような航空部を作っていきたいと思います。